

春期福音特別集会 聖書講筵(京都キリスト召団奥田宅)

自然靈然

——ルカ伝第12章22～34節——

1973年4月29日

小池辰雄

靈食・靈衣はキリスト 自然・靈然・神然 自然と一如の世界 二極相即・二極恒絶 本願道
 靈止は靈然なるもの 祈り

● 靈食・靈衣はキリスト

ルカ伝12章22節から読みます。

22 また弟子たちに言い給う『この故にわれ汝らに告ぐ、何を食わんと生命の事を思い煩い、何を著んと体の事を思い煩うな。23 生命は糧にまさり、体は衣に勝るなり。24 鴉を思い見よ、播かず、刈らず、納屋も倉もなし。然るに神は之を養いたもう、汝ら鳥に優ること幾許ぞや。25 汝らの中たれか思い煩いて、身の長一尺を加え得んや。26 されば最小さき事すら能わぬに、何ぞ他のことを思い煩うか。27 百合を思い見よ、紡がず、織らざるなり。されど我なんじらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、其の服装この花の一つにも及かざりき。28 今日ありて、明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神は斯く装い給えば、況て汝らをや、ああ信仰うすき者よ、29 なんじら何を食い何を飲まんと求むな、また心を動かすな。30 是みな世の異邦人の切に求むる所なれど、汝らの父は、此等の物のなんじらに必要なを知り給えばなり。31 ただ父の御国を求めよ。さらば此等の物は、なんじらに加えられるべし。32 懼るな、小さき群よ、なんじらに御国を賜うことは、汝らの父の御意なり。33 汝らの所有を売りて施済をなせ。己がために旧びぬ財布をつくり、尽きぬ財宝を天に貯えよ。かしこは盗人も近づかず、虫も壊らぬなり、34 汝らの財宝のある所には、汝らの心もあるべし。

これを読んでいると、また新しいことが浮かんでくる。まことに不思議なことですよ。22 ……われ汝らに告ぐ、何を食わんと生命のことを思い煩い、何を著んと体

のことを思い煩うな。
 何を食わんと生命のことを思い煩う必要はない。我々は一番大事な生命を食べている。キリストが即ち私たちの生命ですから。生命の食物ですから。この相対的な食物はどうでもよろしいということになるわけです。今はとにかく、いろんな労資問題とかストライキ



だとかみんなこれは、賃金といいますが、要するにこの「食らわん」ことの問題なんです。ですから、このルカ伝にしろマタイ伝にしろ、キリストのこの言葉は、今の行き詰まった非常に「要求、要求」という世の中に、大上段に構えて、下さなければならぬ言葉なんです。そういった一番根本の心の向き、求めというものは、全然求めるものの方角がまるで違っているわけです。

ここにもあります通り、父の御国を、御国の一番中心であるキリストを求める。キリストを求めないで、相対的なものを一生懸命で求めているから、もう結局いたちごとくでね、悪循環でもつてどうにもならぬというのが日本の現状です。日本の救いというものは、確かに精神的に日本はもう行き詰まっている。経済問題や政治問題が、決して単なる政治や経済の問題ではないんですよ。これはもうすべて根本は――私がしょっちゅう申し上げている通り――文化の根底にはどうしても宗教の世界が絶対に必要なんです。魂があるのは、万人が宗教人であるのに、それを忘れて、求めるべきものを全然別なところに求めている。ですから、なぜ、何を生命のことで思い煩っているのか。生命の生命はあるではないかと。まずそれを満たさないで、絶対的な生命をいただかないで、相対的な生命を求めている。そういう問題をやっている。

「何を著んと体のことを思い煩うな」

と言いましたが、これはパウロが、

「キリストを着よ」

と言っている。「キリストを着る」という。キリストという霊衣を、霊の衣を着ないで――我々は裸でいるわけではありませんけれども――要するに、相対的な問題を或る絶対的なものにしているところに大間違いがある。

そういうわけで、この霊食・霊衣は実はキリストなんです。そうすると、本当に私たちは、「なるほどこれは何も思い煩う必要はなかった」

と。実は、思い煩わないで、淡々としているときに、かえって経済問題も自然になってくる。すべてが本当の自然になっていくということは、これはやっぱり福音のところから来る。

●自然・靈然・神然

この「自然」という言葉で、実は私はこの頃、非常に大発見をしたことがある。

私は普段から漢文の聖書が欲しくてしょうがなかった。今の支那語ではない。昔の漢文の聖書です。……古本屋で漢文の聖書を見つけた。出エジプト記の例のところを開いた。

「我は有りて在るものなり」

を何と訳しているだろうか。そうしたら、

「我は自然にして然るものなり」

と書いてある。楽しいですよ、漢文は。「自然」と書いてあったから、うれしいなと思った。



なるほど、神さまはあるがままのひとなんだと。実にこの大自然、大あるがままなるもの。「有りて在るもの」で、その訳でいいでしょうけれども、本当に在るがままにして在ると、他がみんな在らしめてられている。そして、在らしめられていることが、今度はそれ自身がこの自然になる。

そこで私は、パッとこうきたんです。我々の自然というのはどうなのかということ、これは

「靈然」

という自然なんです。これは今日初めて奥田先生の所で書く。我々はこの靈然なるものです。この靈然という自然。この靈然の世界に入りますと、神的自然なんです。

「神然」

といったってかまわない。神然なるものです。

「どんどん漢語が製造されるんで困ってしまう。あの『この道を往く』を学校の先生たちに読ませたら、

「先生の表現はいろいろ難しい、新しい言葉があつて」

なんてな話も出ていましたけれども。

こういう、靈然、神然なるもの。神さまに本当に在ること。キリストが本当に神さまに在ったときの、あのキリストの自然さというのは靈然というんだな。キリストの自然は靈然なるもの、あるいは神然なるもの。この神さびたところです。神さびたよくな自然さ、これが靈然自然なるもの。私たちはもう——今日は私は楽しくてしようがない——そういうところに入りますということ、これはもうちょっとあれなんだな。さつき、柳の芽の話が出ましたが、

「ああ、春がきていいなあ」

と言う。けれども、もうひとつ言つてくださいますよ。キリストは何と言つたかということ、

「我は真の葡萄の樹」

と言つた。今度は

「我は真の柳の木」

というわけだ。

「春を呼び出したものはこつちでじわる」

と。太陽は、なるほど自然界の太陽は春を呼び出したでしょう。これは相対的自然ではそうですね。けれども、私たちが本当に靈然の世界に入つて、グッとこの自然を見たらば、そこから芽が吹き出す。そこから芽が萌え出でる。春の草木の芽を萌え出すところのもの凄いい力は、これは靈然の世界が持つている。神はこの靈然をもって万物を創造したんです。神さまのこの創造の力は、その靈然の力が創造した。神さまは本当に靈然たる在り方をしている、創造ができる。我々は本当に、



「あつ、春が来た」

「それは来たのではないよ、来たらしめたんだよ」

と。我々がこの霊で――そんなことを言ったら、まるでキチガイかと思われるでしょうけれども――いいですか、本当の魂の奥底はそれだけの、大自然をも目覚ますような、そういった靈然の、そういう力が私たちの全存在の中に燃えているような、そういうようなことになってきたら、

「ああ素晴らしいなあ」

「いやあ、春は、こつちが春でござる。わがうちにキリスト、神の春があるから、

大自然はこれに応えて春となった」

と。そうじゃないですか。パウロは何と言ったですか。

「人間の罪が自然を損^{そこ}なった」

と言った。人間の罪が自然を損^{そこ}なったならば、人間の中の靈然は自然を呼び返す。春の復活は我々が復活させたのである。それだけのクリスチャンの信仰の力になったら、これは凄いことになる。いいですか。そういうような、私たちのこの――何といいますかね――在り方というものは、そのような神と共に創造の世界に入った、靈然の在り方。そうしたらば、

「ああ、今日は天気がわるい」

なんて、もう言いつこなしですよ。内側から晴らしてしまうよ。雲があれども、雲なきが如き世界に入る。もうね、行き詰まりをしらんですよ、こうなったら。運命環境がどうあるうとも、全部これを引っくり返していく。根源的に引っくり返していく。

私は、今日は「靈然」という言葉を神さまから賜って、これはたまらないです。靈然とか神然とかいう。どうぞもう、

「信仰だ、信仰があるの、ないの」

なんて、下らないことはもうやめだ。そういう世界にあつて、バカみたいな顔していればいいんだよ。そうすると、大愚は大賢である。

よく、僕のことを人が言うんだよね。

「先生はなぜ、そんなに元気で若いのか？」

「私は単細胞だからだよ。単細胞というのはいつも変わらないんだ」と言う。本当に神さまによって単純なんだ。

「その目、明らかならば」

というのは、

「その目、単眼ならは」

という字なんだよ。単純である。そういう具合になるのは、このキリストが山上の垂訓で仰った。



「何を思い煩うか。私の中に入って、自然・靈然であれよ。そうすれば、求めるもへつたくれもない。自然に湧いてくるよ」と。

●自然と一如の世界

そういうようなところになってきたら、これが実は大経済の世界、大政治の世界です。老子が説いているのはその世界です。良心の政治なんてのはそこからだよ。支那人が、

「仁をもつて治める」

という境地はやはりそれと相通ずるところがある。今そんなことを言ったら、夢みたいな話でしょうけれども、しかし、夢ではない。一番根源の現実がそこなんです。それを忘れて、「分析の、総合の」と七面倒くさいことをやって、結局これが行き詰まりとなる。文明人は確かにそれで、この20世紀は精神的に世界はもう滅びに向かっていますよ。だから、ここらでもって本当に立ち返らなくては。

支那の毛沢東はなかなか偉いやつらしい。ただ、レーニン・マルクス主義というイデオロギーは——僕はちよつとあの毛沢東の語録を少し読んだら——それは掲げてあるけれども、しかし、その中にやはり孔子、老子、莊子あたりの支那の思想が何となく滲にじんでいるところがある。それはやつぱり、そういった大きなものがあれの中にある。だから、彼らは非常に喜んで労働しているし、ホテルでは全然、鍵が要らないそうさ。それくらいに日本はその点でも負けですよ。私の家内は実は約一か月向こうへ行ってきた……。

皆さん、この福音を受けたら、これは本当に使命がある。原始的な力を持っていないければいかんです、我々の存在の中に。それがこの靈然の世界です。靈然は実に鷹揚おつようとしてゆつたりしているが、一たび事あれば、もの凄い爆発力を持った靈然です。そういう、もう求めるものはない。私たちの中にはみんなあるから。パウロが言っている通り、

「無きが如くであるが、一切のものを持つ」

という。宇宙をも持っているというような、パウロのあの偉大な氣宇は——私は「氣宇」という言葉が好きなんだけれども——パウロのあの偉大な氣宇はまさに宇宙的なキリストを本当に身に体しているから。

ただ「パウロの構造」なんて言っているのではないですよ。普通の神学者なんかはパウロを読めるものか。あのもの凄い幅をもった無限雄大なものは、これは本当にキリストが入っているからです。パウロ、ヨハネ、ペテロはもうキリストが入るとどうですか、それぞれがもの凄いではないですか、このイエスが入ったら。我々だって同じことですよ。器の大小なんかどうだっていい。質的にはみんな、

「パウロさん、ヨハネさん、ペテロさん」

と「友だちのように」はつきり言えなくてはダメです。



「パウロなんて凄くて」
 なんて、そうじゃない。パウロも

「自分は罪びとの首なり」^{かしら}

と、平伏したやつだ。そういうことですよ、この福音の世界は。

「私はカトリックでも、プロテスタントでもない。私はキリストに直結している」と書いたでしょ。そんなことを言うと、

「あの野郎は極端だから、あれはちよつとキチガイみたいだ」

と言って嫌われる。いいですよ、みんなに棄てられて。そのかわり、棄石はみんなを背負ってやるんだ。それだけの気魄をもって我々は行く。だから、キリストはここでも、

「恐るな、小さき群よ」

と言っているでしょ。

「恐るな、小さき奥田の群よ。汝らに聖国を賜うことは汝らの父の御意なり」

と。この幕屋はそれだけの力を持っている。奥田さんのこの頃の自分でお書きになるのを見たって、もう生き生きとしている。

もうこの聖書一巻、この中に飛び込んでいけば、限りなくこの靈然の世界が展開してきますから。そうしたら、もう何と言いますかね、この神経質な妙な無教会なんていうのはもうすつ飛んで行ってしまおう。もう本当に気の毒になるよな。

だから、キリストは愉快ではないですか。

²⁷……**榮華を極めたるソロモンだに、其の服装この花の一つにも及かざりき。**

と。どうですか、キリストというひとは。本当に神の自然の世界。神の生命が、光が、愛が、それが一つの花に本当に咲いていると。一つの草に。『草の葉』というウォルト・ホイットマン [Walter Whitman, 1819～1892 アメリカ合衆国の詩人、随筆家、ジャーナリスト、ヒューマニスト] もそうですけれども、草の葉に、一つの花に、草に、神の生命が宿っている。だから、私たちは自然と本当に一如の世界です。

●二極相即・二極俱絶

「二極相即」という。大体この相対界はみな、これを煮つめてみると、二極相対の世界なんです。善悪、明暗、男女、それから強弱、賢愚、何でもかんでもみんなそうやって区別するでしょ。そしてそれにいろんな段階があるでしょ。そして

「どうだ、こうだ」

と比べて比較研究をやっている。これを二極相対という。そういう相対界は、二極相対ですつたもんだやっているんだ、

「あれかこれか」(entweder, oder はずれかひとつ)

と。いつて。



ところが、「二極未分」というやつがある。二極未分の世界。この二つの極が未だ分かれな
光と暗のもうひとつ前の世界。男女のひとつ前。霊肉のひとつ前。あるいは、生死、静動、
宗教的にいえば凡我、なんていうのはそのいろんな分かれの未然の世界です。二極未分と
いますか、あるいは「未生道」という、未だ生ぜざる未生の世界。その世界を把握す
ることもまたこれ、この二極相対のもう一つ前のところを、それを把むことがひとつの大
事な境地です。あの有名な、

「闇の夜に鳴かぬ鳥からすの声きけば生まれぬ先の父をしぞ慕う〔恋しき〕」

という白隠の歌がある。「闇の夜に鳴かぬ鳥の声を聞く」という。鳥は真つ黒だから闇にい
たら分らない。しかも、その鳴かない鳥の声を聞くというのは、鳴く前の世界、その声
を聞くという。そうすると、生まれぬ先の父が恋しくなるという。これはまだ未生の世界。
生まれぬ先ですから。白隠のあの句が非常にその境地を表している。

普通は、見たり聞いたり感じたり触れたりという、この認識の世界です。

「二極相対」

はこの認識界です。認識相対界。文化文明の世界。それが生ずるもうひとつ前の世界の把握。
これがあるひとつの宗教的な境地です。

それから、

「一極絶対」

というのがある。「一極」というと、たとえば東と西というでしょ。そうすると、東だけ。
あるいは、右と左というと、右だけか、あるいは左だけ。それが一極でしょ。一極絶対と
いう。それはどういうことかというのと、

「隻手せきしゆの声を聞く」

という。拍手は両方の手を、左と右の手を打てば、音が響くでしょ。ところが、この「隻手」
ですね、片一方の手。この一極において、もうひとつ右なら右でもつて左もちゃんと含ん
でいる世界。これを二極絶対という。祈る時に片手〔右〕で祈ると、キリストの手がこちら
〔左〕にやってくる。自分の左手でなくて。そうすると、一極絶対の境地に入る。右にいな
がら右に執しない。闇にいながら闇に執しない。光にいながら、単なる相対の光ではない。
有無といって、相対的な無でもなければ、相対的な有でもない。そういうのが一極絶対と
いう。これも大事な宗教的な境地なんです。たとえば、中心でありながら周囲がないとかね、
そういったような境地です。

もうひとつ、

「二極俱絶ふたごうぜつ」

という。二極が俱ともに絶する。二極俱絶、これは否定的な表現になる。

「ぐずれどもなく」(weder, noch 云々でもなく、…でもない)

というやつ。たとえば、「東も西もない」



「東西なし南北何処にかあらん」

という。たいてい、方角といえば東西南北でしょ。「東西もなく、南北もない」という。即ち、何処に行きましても、そこが東でもあり西でもある。南でもあり北でもある。いずこにおいてもはやその東西南北を掌握しているような世界。

大体、我々は地球に住んでいるでしょ。球体というものはそういうものなんですよ。東、東というけれども、何ですか東とは。グルグル回ってまた元へ戻ってくる。西、西というけれども何ですか西とは。西へ行けばまた元へ戻ってくる。北へ行っても戻ってくる。南へ行っても戻ってくる。だから、球形というのは素晴らしい。どこへ行こうがみんな出発点に戻ってくる。一点が東西南北、四方八方を全部含んでいる。そこに絶するんです。これが二極俱絶という。私たちは在りながら、全部それを掌握している。こういうった境地。

これは宗教的な境地はみなそういうような、相対を絶するような消息を持っているわけです。老子の思想が非常にそれなんです。だから、支那の思想家では老子はとにかくでっかい。老子を読んでごらん下さい、面白いから。

それから、

「両極相即」

ということ。これは今の「両極俱絶」と、ある意味においては同じことになる。私たちは、福音的にはこの世界がよくつかめる。たとえば、靈肉一如です。色即是空とか、空即是色とか。それから、聖俗不二、聖と俗が二つない。菩提煩惱不二。穢土即極樂。地獄即天国。善悪不二。生死不二。静動一如。凡我一如。

そういうのが、この「二極俱絶」という。これは御霊の世界に入ると、これがはつきりつかめる。男でありながら、ちゃんと女性がつかめる。女性でありながら、ちゃんと男性が自分の中にある。それが本当の人間性という。キリストなんか正にそうです。キリストは全く女性みたいな人です。かと思うと、もの凄い男性です。神さまに絶対服従して、絶対信頼している、その在り方は女性道です。ところが、これがもの凄い力を持っている。これが男性道。いわゆる男性も、いわゆる女性も、これはダメなんだ、行き詰まってしまうんだ、どっちも。ところが、本当の女性、本当の男性は、これは一つなんです。不思議な世界です。

そういった、生死一如。本当に、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや生くるにあらず。キリストわ

がうちにありて生き給うなり」

という、あのパウロのガラテヤ書2章20節、これが生死相即の世界。「十字架・復活・聖霊」の事態が——私はこれを三相一貫と言うけれども——これは要するにみな一つになっただけまう。

そういった、「二極俱絶」とか、「二極相即」というような事態、これが最高のところですよ。



これが本当の、さつき言った「靈然」の世界、靈然・神然の世界です。

●本願道

どうですか、あの親鸞あたりの言葉を聞いても、

「自分は地獄に墮^おつるとも、浄土に還るとも、総じて存ぜざるなり」
 なんていうのは、これは絶しているんですよ、二極俱絶している。そうすると、本当に、それが相即してちゃんとかんではいる。いわゆる救いを求めているのでも何でもありません。これが即ち私がこの頃言っているところの、

「本願道」

なんです。本願の世界に入るといって、これがやってくる。悟り澄ますのではない。本願の世界です。神さまの本願の中に自分を没入させたから、この本願道でもってキリストは行った。これを全部つかんできました。もう何とも、およそ「デフィニールン」(definieren) 限界を明示する、定義を下す) できない。これはゲートもそう言っている。

「限定できるものは本当の世界ではない」

というのは、正にそうです。

「無窮、無限、無量」と、私は獨協医科大学の校歌を作って、終わりの方にそういう語を並べてやった。

〔註：「我らが希望(のぞみ)無窮なり／我らが命数(さだめ)無限なり／我らが使命(つとめ)無量なり」〕

そういうわけで、正に

「われと父とは一つなり」

でしょ。本当にキリストは自分を本当に無者としたら、無即無限の世界でキリストは父と一つです。私たちが全くキリストの恩寵において、

「われとキリストは一つなり」

と言える。あのガタガタなペテロさんが何と言ったですか、

「我を見よ!」

と言ったではないですか、聖霊のきたペテロは。まあ何とも言えないですね、私たちはもう楽しいよね。もう集会が集会でないですよ。

こないだ、緑内障にかかったという私の小学校時代の同級生の女の人がいて……。私は『この道を往く』も送ってやったけれども、あそこに、

「私はカトリックでも、プロテスタントでもない。キリストに直結している」

と書いたものだから、

「ちよつとこれは少し極端かな」

なんて考えているのか何だか知らんけれども。我々のは集会に来てみなければ分からない



んですよ、想像していたのでは。

「なるほどこれはやっぱり一番自然な世界だな。いわゆる宗教臭くなくて、もの凄
い本当の宗教の世界だな」

ということを、じかじかに来てみれば、分かってくる。魂が偽りのない世界ですから。私
が偽りのことを言っていたら、それはダメですよ。しかし、本ものを言っていれば、必ず
本ものは本ものに通ずる。誰だつてそれがあるんだから。自然がちよびつとあるんだ、み
んな。その自然の芽を吹き出させて、その人の中に本当の春の甦りをもたらすが、我々
の仕事なんだ。ソクラテスの哲学ではないけれども、産婆役なんだ。

万人は宗教人であつて、神さまに直結しなければ、キリストに直結しなければ、済まな
いようにできているのに、

「それだけはちよつと待つてください」

と、みんな一番大事なことを断つていて。一番大事なところにだけ蓋ふたしてしまつてい
るんだから、これではどうにもならないですよ。

そういうわけで、このルカ伝の12章をこつこつと読んでみると、もう楽しくてしょうが
ない。読んでいると響きが変わつてくるです、靈然の世界に入るから。

「何も思い煩わなくていいと言つたつて、それはちよつと困るではないですか、こ
の文明の世の中で」

と、そんな読み方をしたら、読めないです。大体みんな、そういう読み方をしているんだ
よね。

だから、キリストが、

「ああ、信仰うすき者よ」

と言う。もうキリストに投げかけなければしょうがない。

²⁹なんじら何を食くらい何を飲のみまんと求むな、また心を動かすな。

と。仏教の方に「金剛心」という言葉がある。これはいい言葉だ。「心を動かすな」という
のは、不動の心、金剛心ということ。金剛石というね、ダイヤやモントです。これは無色透
明だ。無色にして無限色を持つ、無限の光を持っているのがこの金剛心。そして動かさない。
動かないけれども、もの凄い柔軟性を持っている。動かなくて固いのではないですよ。

キリストが「思い煩うな」というのは、もう本当にくつたくなるところの、
「自然を甦ふたらせたのは、春を来らしたのは俺だぞ」

というように、偽りなくそういう気持ちになつてくる。それはキリストの中に入つてしまふ。
創造の神さまの中に入つてしまふ。そういうふうになつたら、

「ああ、この春の自然よりもなお自然な靈然の世界を頂いて、ありがたいな」

と、もうあなた方は…(異言)…この中からグーツと込み上げてくる。もう言葉が
言葉にならない。だから、自然に「宝を天に積んで」いる。「宝」なんていうようなもので



はない。キリストの言葉の奥を読むわけです。

さつき読まれたイザヤ書44章は私は大好きなところだ。素晴らしい言葉です。本当にイザヤ書というのは旧約の福音ですから。また、新約にないような響き、壮大で雄渾な響きを持っていて。やはり、この第二イザヤなんていうのはもの凄い霊的な、靈然の中にいた人だよな。

もう今朝、私は「靈然」の一語を賜っただけでたくさんだ。そういう相対を絶した、さつきから申し上げているところの、一極絶対、二極未分、二極俱絶、それから、二極相即というようなところに入ると、

「一切の秘訣を得たり」
 ということになる。どうぞ、そういうところでもって進んでください。

● 靈止は靈然なるもの

貝原益軒(1630～1714、江戸時代の本草学者、儒学者)の言葉にこういうのがある。

「心は人の神明にして、衆理具わりて、

心は人の神明である。やはり益軒あたりは偉い。これは単なる道德家ではないから。諸々の理がちゃんとそこに備わっている。自然に備わっているんだ、衆理が。

而して万事出づ。人の万物の靈たる所以のものはただここにあるのみ。」

すべての事柄がそこから出てくる。人は即ち万物の靈であって、霊的な中心なんだ。あの『言志録』を書いた佐藤一斉(1772～1859、美濃国岩村藩出身の儒学者)でもそうです。非常に漢文ができますから。

「心は人の神明にして、衆理具わりて、万事出づ」

と。即ち、心は神明である。人間の心、魂、靈——何と言ってもいい——それは人の神明であるというのは、心はそこに神が宿しているところだと。明らかなる神の明らかさが、神が宿しているところが即ち心である。心は本来、神が宿しているところ。要するに、それが本当に御霊をいただくと、その宿していることが——いつかもしました通り、「ひと」は靈が止まると書いて「靈止」でしたね——靈が止まっているところなんだ、本当は。靈が止まっているはずのものが、靈が止まらな。だから、靈が止まったら、靈然なるもの、靈然なるもの。靈止は即ち靈然なるもの。我々は即ち靈然なるものが我々の本質です。それを本当にパラダイス・リゲインド(樂園回復)して下さったのがこのキリストですから。キリストの絶対恩寵で我々は靈然なるものになった。そういうわけです。

そういう境地に入る。このキリストの言葉を読んで、これだけの捉まえ方をしたら、イエスさまも、

「そうだ、そうだ。よく読んでくれた」

と天界で喜んでいる。もう何をか言わんやです。どうぞ、そういうことで行きます。



一休和尚の歌がある。

「妙たえにして神あるものは心かな天地にわたり微塵みじんにもいる」

「自分は塵芥ちりあくたである」

心は塵の中にも入っている。塵の心にも入っている。パウロが、と言ったでしょ。パウロさんとやっぱり共通している。パウロをただ神学者なんて言っているからおかしなことになる。

大自然、大天地にも入るかと思えば、小さな塵の中にも入って、心というものはすべてそういうものと相即していく。小さな虫の心にも自分になる。虫を見れば虫となり、ひとつの雑草を見ればその雑草ともなる。水を見れば水となり、柳を見れば柳となる。というようなわけで、もう本当に一如です

あのモネという絵描きが――そのうちに京都でもやるらしいけれども、来たら見てもらんなさい――非常に自然の中に自分を溶け込んで描いたらしい。もうたまらないらしい。

とにかく、第一流のものはみんなそういうった何か絶対的などころに入っているんですよ。あなた方は何をしようが、学問をしようが何をしようが、絶学ぜつがくの学がくというやつがあるんだから。学がくに執着しやくしやくしているのは本当の学がくではない。

西田幾多郎先生の哲学をみても、

「この本の何頁に何が書いてある」

なんて、そんな下らない論文は書きやしないんだ。みんなそんなものはあの中に溶けてしまっている。そして、何か詩でも書いていこうなものだ。プラトンの『対話篇』みたいな。そういうったようなところが、第一流の境地になると、みなそうです。最後には何も書かないんだ、お釈迦さんやキリストみたいに。不立文字ふりゅうもんじなってしまう。まだ私みたいに書いているのはダメだ。もうこの頃は録音で、あまり書かないけれども。皆さんにお任せてして申し訳ない。だから私は、

「そんなちつとも書かない奴は、そんなのは相手にしないで、棄てていいですよ」と、こないだ「ハレルヤ」誌に書いたでしょ、

「どうぞ、遠慮なく棄ててください。けれども、こんな野郎といつまでも一緒に行きますという方々とは行きますから」

と。あなた方はそういう方々です。キリストのこの真理には、私がどんな野郎だって、そんなことは問題でない。私はこのキリストに圧倒おぼろされながら進んで行くんですから。

ナポレオンがセントヘレナで最後に、

「福音書は文字ではない、まるで生き物だ。これは文字ではない。活けるものである。火が燃えているようなものである」

と言って驚嘆して告白した句がある。ナポレオンも遂には、福音書には、キリストには降参こうさんした。さすがに、それを見たナポレオンはやっぱりナポレオンだ。



もう私はキリストに酔っているんです、正直。キリストにだけは、どうぞ皆さん、酔える人になってください。あの無教会なんていうのはケチ臭いから、「酔う」なんて言うのと、

「何だ？　そういうのは危険だ。そんな神秘主義は危険だ」

なんて、「神秘主義だ」と思う。そうじゃないですよ。そんな分析して、ただこつち側から「十字架、十字架」なんて言っているのではない。

本当にキリストの中に祈ってごらん下さい。本当の靈然の世界に入ったら、もの凄く相對界をちゃんと捉まえてしまうから。オリエンティーン「方向づけ」ができますから。実はもの凄い細緻な分析もできるような鋭さも出てくる。そういうわけで、学問も本当の学問が出てきます。だから、何をしようと、音楽をしようが、どんな仕事をしようが、全部、

「一切の秘訣を得たり」

ということになる。もうこれはとても表現できない。皆さんも、共感して下さっているとありますが。それでは、終わります。

● 祈り

天地万物を創造し、人類を深く顧みたまう、驚くべき深き愛の、また広大無辺な知のご計画を新天新地に向かって進め給うところのおん神さま。

今日は、奥田君のこの幕屋において春の特別な集會を、この記念すべき日に持たしめられ、あなたより賜いたる「靈然」の一言を感謝いたします。

かくして、主さま、本当にイエス・キリストの主さま、あなたの山上の大告白の一端をはたと受けとらしめられ、誠に主さま、あなたを食らい、あなたを着、あなたの靈に連なるところの、春を甦らせるところの驚くべき、この靈的存在、靈然なるものに私たちをしてくださり、この大御恩寵を感謝いたします。

主さま、本当に聖名を讃え奉ります。今日の午後のU君の人生の新しき第一歩「結婚式？」を勇ましく進ましめたまわんことを願ひ奉ります。

今、心からの感謝と讚美、兄弟姉妹の中にあるすべての者、また今日は来ようとしても来れなかった者、また本当に諸所で悩みを負っているところの兄弟姉妹たちに天来の光を与えて進ましめんとしている、この聖書を開けば直ちにそこから、主さま、あなたの世界に入るその秘訣を彼らに開き給わんことを願ひ奉ります。

今、本当に、主さま、この日本の国は四方八方向き詰まっておりますが、天界は豁然として開かれています。これに向かって、主さま、あなたのご本願をいただき、そして縦横無尽なる歩きを本当に確実になさしめ給わんことを願ひ奉ります。

今、心からの感謝と讚美、聖名のゆえに、聖名によりて、捧げ奉ります。アーメン。

